

石濤の芸術観 「生辣中に破砕の相を求む」をめぐって

蝦名敦子

石濤の芸術哲学が最もよく象徴されていると言われるこの一節について、『莊子』の例え話との類推考察や先行研究を踏まえながら、再検討したものである。この一節には技の微妙な「こつ」の伝授に留まらず、より積極的な創造のプロセスが示唆されており、そこに石濤独自の芸術観が特徴づけられる。破調が進歩する道程として位置づけられている所に、具体的な作画における一つの指針として重要な意味を持つことを指摘した。